桃色烏天狗

榛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桃色烏天狗

【Ｎコード】
Ｎ９４００Ｗ

【作者名】
榛

【あらすじ】
あのマスク、どうしてあんな風に見えるんでしょうね。

「ねぇーまま、あのひとおかおがへんだよ」
テレビを見ていた息子のあげた声に洗濯物を干す手を止め目をやると、息子はテレビに大きく映った脂で額を光らせている大臣を指差し首を傾げていた。
「どうして？　マー君、あのおじさんのお顔は変じゃないよ」
「だって、ぴんくのおかお……」
更に首を傾げる息子に言われ、よくよく見てみれば、大臣の奥に映る人たちの一人、若い男がピンク色の立体マスクをしていた。
「あぁ、烏天狗マスクか……」
つい口を突いて出たのは、立体マスクの先がシュッと尖っているところから、私が街中で見る度に密かに思っていたことだ。あの形といい付ける位置といい、烏天狗のくちばしに似てるんだよね。
「から、てぐ？」
「いいのいいの。あのお兄さん、風邪でもひいてるんだよ。あのピンク色のはマスクだよ」
「ぼくもしたいっ！」
カラン、と息子が動くのにあわせて、頭の下に敷いた氷枕が鳴る。
「じゃあ元気になったら、買ってあげるね」
そう言う私に少しむくれた顔をする息子の、まだ熱の残るおでこを撫でる。
「ままぁ」
「なあに？」
「やすそくだよ」
「うん、約束」
布団からのびてきた小さな小指と指切りをし、布団をかけ直して

やる。息子は嬉しそうに笑った後、再び瞼を下ろした。

君が治る頃には、もうあのマスクは必要ないかな。

（後書き）

三題噺として作成したものです。
題：大臣、ピンク、嬉しい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9400w/

桃色烏天狗

2011年11月1日02時11分発行